

佐賀方言の疑問助詞と 介入効果についての記述

日 高 俊 夫

1 はじめに

wh 要素とその認可要素の間に、否定極性要素、選言要素、焦点化マーカ、ある種の量
化表現が介在すると容認性が落ちることが知られている。

(1) Intervention Effects: *[Qi [...[intervener [... wh-phrasei...]]] (Beck, 2006)

(2)が示すように、東京方言ではこの介入効果が観察される。

(2) a.?*誰も何を読まなかったの。

b.???ジョンかビルが何を読んだの？

c.?*ジョンしか何を読まなかったの？

d. ??誰かが何を読んだの？

(Tomioka, 2007)

一方、佐賀方言は介入効果に関して東京方言と異なる振る舞いを示す。本論では、(2)のう
ち、佐賀方言における否定関連の介入効果を観察し、東京方言との違いを記述したい。ま
ず、介入効果を観察・分析する前に、佐賀方言には東京方言とは意味および機能が少し異
なると考えられる疑問標識があるので、それらの記述的分析を行なった後に介入効果の観
察に入る。

2 佐賀方言の「と」「ね」「こ」「かにゃ」「こっちゃんい」

佐賀方言には疑問の終助詞としては「と」「ね」「こ」「かにゃ」「こっちゃんい」がある。
東京方言との対応を概略すると、次のようになる。

(3) a. 「と」：話者の性別を選ばない。「の」に相当。

b. 「ね」：主に女性が使う。「の」に相当。

c. 「こ」：主に男性が使う。「か」に相当。

d. 「かにゃ」：話者の性別を選ばない。「かな」に相当。

e. 「こっちゃんい」：話者の性別を選ばない。「か」「かどうか」「やら」に相当。

この中で「こっちゃんい」に関しては日高(2014)にある程度詳しい分析があるので、ここで
は、それ以外のものに関して観察する¹。

¹ 本稿では、東京方言との違いを分析するというよりも、佐賀方言の中でこれらの形態素の意味機能を

2.1 「と」

「こ」が主に男性によって使われ²、「ね」は主に女性が使用するのに対して、「と」は性別に関係なく使われ、「こ」よりも柔らかいニュアンスを持つ。その意味では東京方言の「の」に相当する。人称に関する制限や肯否・疑問詞疑問文による使い分けも特にない。音調の面では肯否疑問文と疑問詞疑問文では違いがある。

(4) a. あんたゆうベワインば飲んだと？

b. 由美はゆうベワインば飲んだと？

このような肯否疑問文の場合、文末の「と」の前までは低く抑えられ、「と」で急激に上昇するパターンと、「と」が上昇しないパターンの2つがある。文末が上昇しない図2のような音調の場合、「ワイン」が疑問の焦点となる解釈が可能であるのに対して、文末が上昇する図1の音調では、「ワイン」をことさら強く発音しない限りその解釈はなく、由美に関して「ゆうベワインを飲んだかどうか」という、述部全体が疑問の焦点となる解釈となる。

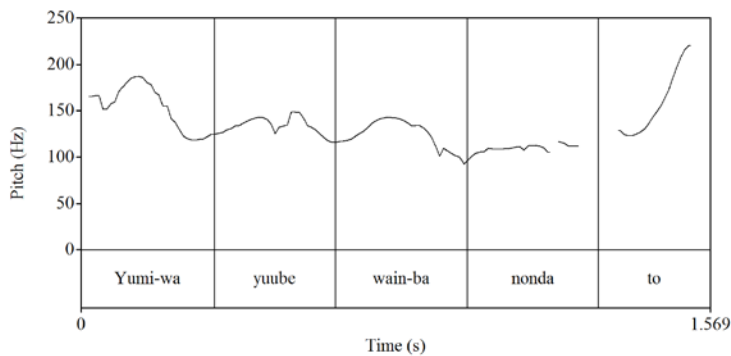


図1: 由美はゆうベワインば飲んだと？

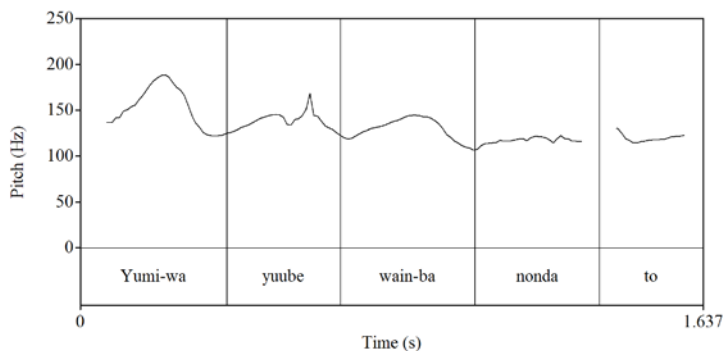


図2: 由美はゆうベワインば飲んだと？

一方、疑問詞疑問文の場合、基本的に図1と同様の文末が上昇するパターンしかない(図3。

記述することを主眼とする

² 女性でもかなり年配の女性(80才前後以上)の女性が使うこともあるが、どちらかといえば女性は「ね」を使うことが多いように思われる。

文末が上昇しないパターンも存在はするものの、その場合、「なんば」の部分が強く発音され、聞き返しや詰問のような解釈になる)。

- (5) a. あんたゆうべなんば飲んだと?
b. 由美はゆうべなんば飲んだと?

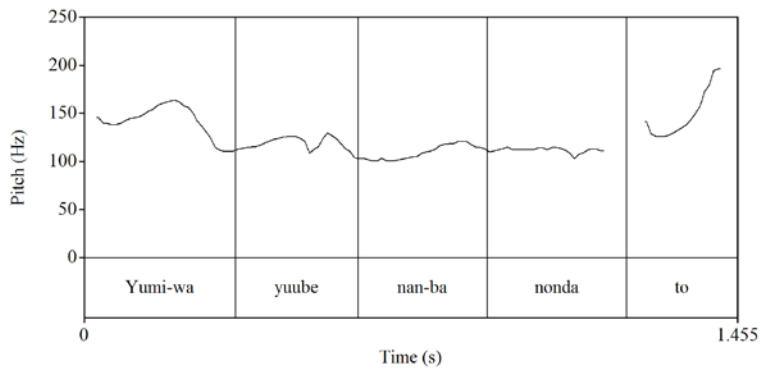


図3: 由美はゆうべなんば飲んだと?

疑問標識としての用法の他にも、次の例が示すように、「と」は東京方言の「の」と同様に名詞化標識としても機能する³。

- (6) a. この車はおいがとぼん。(この車は僕のだよ。)
b. 机の上にあつとば取って。(机の上にあるのを取って。)
c. その黄色かとば持って来て。(その黄色いのを持ってきて。)

2.2 「ね」

「ね」は女性によって使われることが多いが、柔らかいもの言いをしたい場合には男性にも使われることがある。まず、音調の面で「と」と異なるのが、「ね」の場合は文末が上昇するパターンがないということである。

- (7) a. あんたゆうべワインば飲んだね?
b. 由美はゆうべワインば飲んだね?

また、疑問詞疑問文に用いられても基本的に上昇せず⁴、「と」に比べると若干詰問的なニュアンスが感じられる。例えば、(8a)であれば、典型的には聞き手が今二日酔いでとても辛そうな顔をしていて、話し手が、聞き手がゆうべ飲み会に出席していたことを知っているような場合に、心配してあるいはあきれて尋ねる場合等が考えられる。

- (8) a. あんたゆうべなんば飲んだね?

³「の」と完全に意味機能が一致しない部分もあるが、本論と直接の関係はないと思われるので、詳しい分析は今後の課題としたい。

⁴上昇しても解釈はできるが、若干違和感がある。

b. 由美はゆうべなんば飲んだね？

さらに「ね」は「と」の後に続くこともできる。

(9) a. あんたゆうべワインば飲んだとね？

b. 由美はゆうべワインば飲んだとね？

c. あんたゆうべなんば飲んだとね？

d. 由美はゆうべなんば飲んだとね？

(9)と(8)でさほど大きな意味や使用文脈の違いは感じられないが、(9)は、聞き手が答を知っているという前提のもとに話し手が問い詰めているニュアンスがある。

2.3 「こ」

「こ」は、先述のように、主に男性によって使われる疑問の終助詞で、丁寧さはない。また、東京方言の「か」と異なり、間接疑問文の埋め込み節に準じるような構造に用いることはできない。主文の文末位置にしか用いられず、その後にかなる要素も続くことができない。音調の面では、「ね」と同様に上昇しない⁵。

(10) a. 東京方言： 僕は田中が昨日ここに来たか知らない。

b. 佐賀方言： *おいは田中が昨日ここに来たこ知らん⁶。

(11) a. 東京方言： 田中は昨日ここに来たのかね？

b. 佐賀方言： *田中は昨日こけ来たとこにゃ？

また、「か」が「の」の挿入なしでは（自問ではない）純粋な疑問文としては成立しにくいものに対して、「こ」は名詞化標識の「と」の有無に関わらず、純粋な疑問文としてしか用いられず、自問としては機能しない。

(12) a. 東京方言： 田中は昨日ここに来た??(の)か？

b. 佐賀方言： 田中は昨日こけ来た(と)こ？

(13) a. 東京方言： 田中は昨日ここに来たのか？（自問でも使える）

b. 佐賀方言： 田中は昨日こけ来た(と)こ？（自問では使えない）

「と」が入る形は、話し手が、聞き手が直接太郎が来たことを目撃せず、人づてに聞いてそのことについて知っている想定している場合に使うこともできるが、「と」が入らない形は、話し手が、聞き手が太郎の来訪を直接目撃していることを前提にしているという違いが感じられる。

⁵「ね」と異なり、「こ」が上昇してしまうと全く容認不可能になる

⁶この場合、佐賀方言では補文標識位置に「か」も用いることができるが、「こっちゃい」を用いて「おいは田中が昨日ここに来たこっちゃい知らん」となる。

2.4 「かにゃ」

「かにゃ」は、形態的には東京方言で言の「かね」あるいは「かな(あ)」に相当し、主文の文末のみに生起する。形態的に「か」と「にゃ」に分割できる直感はあるものの、「にゃ」が単独で、あるいは「か」以外の形態素と結びついて用いられることはなく、常に「かにゃ」の形をとる。

(14) 田中は昨日こけ来たかにゃ？（田中は昨日ここに来たかな？）

(14)は、話し手が聞き手との共有知識を確認するため使用される。例えば、話し手と聞き手が昨日この場所に一緒にいて、複数の人間がこの場所に来たことを一緒に体験しており、その中に田中がいたかどうかをお互いに今確認しているといった状況が考えられる。韻律の面では、文末が上昇すれば、このようなことを相手に確認する疑問文あるいは自問になり、上昇しなければ自問のみの解釈となる（その意味では「かな」と似ている）。

「かにゃ」は名詞化標識の「と」の後に続くこともできる。

(15) 田中は昨日こけ来たとかにゃ？（田中は昨日ここに来たのかな？）

ただし、この場合、話し手が聞き手と共有の知識をもっているまでの必要はなく、聞き手が答を知っているはずだという確信を話し手が持っていればよい。むしろ、相手との共有知識がある場合は「と」なしの(14)の形でなければならない。

「かにゃ」は、話し手が聞き手との共有知識を確認するため使用されるので、主語が二人称になった場合、はっきりしない自分の記憶を、共通の知識をもつ聞き手に対して確認するようなニュアンスをもつ。

(16) あさんな昨日こけ来たかにゃ？

(16)の文は、昨日自分もこの場において、その時には相手が来たかどうかは認識していたはずだが、その記憶がなく、相手に確認している場合に用いられる。これに「と」が入って「とかにゃ」になると、やはり「共有知識」までは必要なくなる。通常、聞き手も自分の昨日の行動くらいは記憶しているであろうから、主語が二人称の場合は、話し手が聞き手自身の行動を確認するために自然に用いられる。

(17) あさんな昨日こけ来たとかにゃ？

以上、佐賀方言における疑問の終助詞の意味機能を概観した。本稿では、この中で、主に「こ」に焦点を当てて介入効果についての観察を行う⁷。

3 否定の介入効果

伊藤(2014)によれば、日本語（東京方言）のyes-no 疑問文は否定の介入効果を受ける。

(18) *君はトフルかトーイックを受けたくないか？（伊藤 2014 改）

(18)は、「ない」にアクセント核がなく、低く発音される場合には否定疑問文ではなく勸

⁷その他の終助詞に関しては今後の課題としたい。

誘的な意味になり、その解釈でなら問題なく容認される。つまり、介入効果と韻律、特に「ない」がどのように発音されるかは密接な関係を持つと考えられる。そこで、本節では、否定の「ない」と韻律と意味解釈の関係を論じた Ito and Oshima (To appear) を下敷きに、佐賀方言における否定の介入効果を概観し、東京方言との違いを考えてみたい。

3.1 否定疑問文とイントネーション

Ito and Oshima (To appear) によれば、日本語の否定疑問文の意味解釈はイントネーションと大きな関連を持つ。

(19) Japanese has two tonally different varieties of the negative polar interrogative, and this tonal contrast has an information-structural basis. (Ito and Oshima, To appear)

(20) a. 甘くない？

b. A is eating an orange. B has heard that oranges this year are exceptionally sweet (although he has not eaten one so far). B utters (20a).

→ P(osition) type: the phrase containing the negation is *part of ground*

→ The negation is “fake”.

c. A eats a piece of orange and makes a grimace. B utters (20a).

→ N(egative)N(eutral) type: the phrase containing the negation is *part of the focus*.

→ [I]t has the ability to license an NPI while it is not compatible with a PPI. /

The negation is a “genuine” or “true” negation.

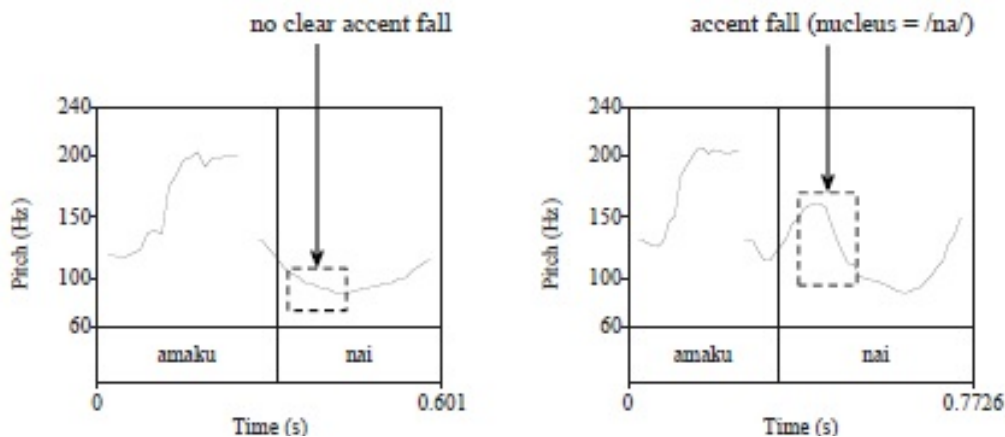


図 4 : “Amaku nai?” uttered in situations (20a) (left) and (20b) (right) (Ito & Oshima, To appear)

ここに限らず、「ない」にアクセント核が置かれない場合、「甘くない？」という疑問文における「ない」は本来の否定の機能を果たさない。その結果、答の文も、甘い場合には「うん、甘い」、甘くない場合は「いや、甘くない」のように、「甘い？」という疑問文に対する答のパターンと同様になる。

(20) に相当する佐賀方言の「あもうなか」という文も、P type とNN type でイントネーションが異なる。

P type (図5左図) の場合には「あもう」の「も」をピークに文末まで下がり続けるのに対して、NN type (図5右図) の場合、「なか」の「か」の部分でピッチが上昇している。つまり、無アクセント方言である佐賀方言でNN type の解釈を生み出す鍵は、アクセント核(下がり目)というよりも「ピッチの上昇」であると言える。東京方言においても、NN type に解釈されるには、「ない」の「な」の部分のピッチが上昇する。東京方言においても佐賀方言においても、この「ピッチの上昇」(東京方言はその直後にアクセント核がくるのでそこで下がる)が重要な役目を果たしているように思われる。

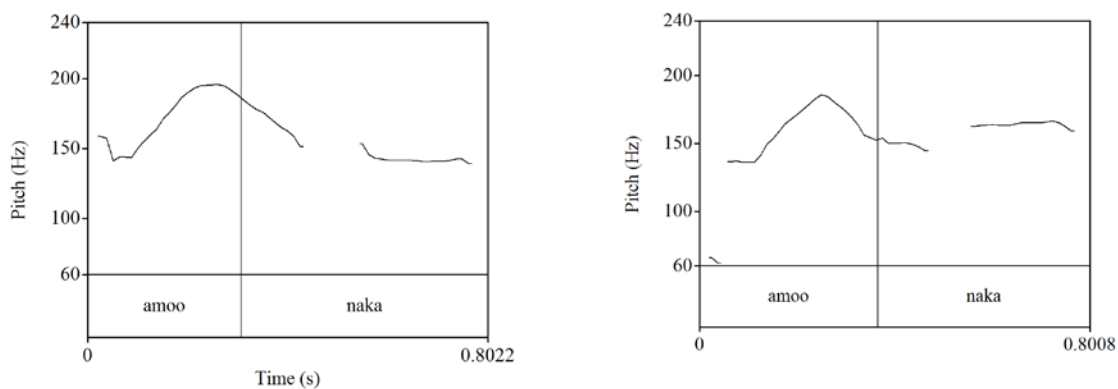


図5：“Amoo naka?” uttered in situations (20a) (left) and (20b) (right)

以下では、この「ピッチの上昇」を軸に佐賀方言における否定の介入効果を観察する。

3.2 佐賀方言における否定の介入効果

否定の介入効果について、佐賀方言は、東京方言と異なった振る舞いを示す。先ほどの(18)の東京方言の文は、否定疑問文として機能する (Ito and Oshima (To appear) で言えば NN type として解釈される) ためには、「ない」に音声的卓立が置かれる必要があり、そうでなければ勧誘的な意味になり (P type)、容認される (概略、「[]」は上がり目、「[]」は下がり目を表す。)

(21) a. *君は[ト]フルか[トー]イックを[受けた]く[な]い[か? (NN type)

b. 君は[ト]フルか[トー]イックを[受けた]くない[か? (勧誘：P type)

Ans. はい、受けたいです。/ いいえ、受けたくありません。

このように、東京方言では、「ない」にピッチの上昇があるとNN type と判断され、介入効果が働き容認されなくなるが、佐賀方言では、(22)が示すように、「なか」が上昇しても容認可能で、P type としても、また、若干不自然さは残るものの、NN type としても容認可能である。

(22) あさんな[トフル]こっちゃん[トーイック]ば[受けて]う[なか]こ? (P type / ?NN type)

P type: Ans. うん、受けたか。 / いんにゃ、受けとうなか。

NN type: Ans. うん、受けとうなか。 / いんにゃ、受けたか。

つまり、佐賀方言においては、NN type の解釈と否定辞「なか」の上昇とが関連しないということになり、(22)の文がNN type の解釈で容認可能なことから、佐賀方言は、東京方言に比べて否定の介入効果が弱いことがうかがわれる。

さらに、佐賀方言では、東京方言の「か」にはほぼ相当する「こっちゃん」が下がらず、「トフルこっちゃんトーイック」がすべて高く発音されるイントネーションも可能であり、その場合、NN type として、より容認されやすくなる。

(23) あさんな[トフルこっちゃんトーイック]ば[受けて]う[なか]こ?

Ans. うん、受けとうなか。 / いんにゃ、(トーイックは)受けたか。

(23)の文はP type としても問題なく容認可能である。つまり、佐賀方言では、「なか」が上昇しない音調が存在せず、「なか」が上昇する音調の文がNN type とP type の両方に解釈可能であるという曖昧性が存在することになる。

ところで、東京方言でも、名詞化接辞の「の」を入れるとNN type の解釈が可能になる。

(24) 君はトフルかトーイックを受けたくないのか?

Ans. はい、(どちらも)受けたくないです。 / はい、トフルを受けたくないです。 /

いいえ、(どちらも)受けたいです。 / いいえ、トフルは受けたいです。

一方、(23)の佐賀方言においては、東京方言の「の」にあたる「と」の介在がなくても(24)と同様の解釈が可能であった。もちろん、「と」を挿入してもその解釈は可能である。

(25) あさんな[トフルこっちゃんトーイック]ば[受けて]う[なか(と)]こ?

Ans. うん、(どっちでん)受けとうなか。 / いんにゃ、トフルは受けたか。

まとめると、東京方言では「の」の有無とNN type としての解釈の可否が対応する(「の」があればNN type として解釈可能で、なければ不可能)のに対して、佐賀方言では「と」の有無にかかわらずNN type として解釈可能であるということになる。

ここから考えられることは、東京方言は、名詞化標識の「の」が挿入された場合とそうでない場合は統語構造が異なるということである。「の」が挿入された場合、「トフルかトーイックを受けたくないの」で複合名詞句ができるので、文末の「か」との間に介入効果が生じない。実際、複合名詞句を含む(26)は、NN type として解釈可能である。

(26) 君はトフルかトーイックを受けたくない心境か?

「の」が挿入されない場合は単文構造になるので介入効果が働くということになる。

一方、佐賀方言の場合、名詞化標識の「と」がなくても介入効果が働かないということから考えると、「と」がなくても、それがあのような統語構造になっている可能性がある。具体的に言えば、「トフルこっちゃんトーイックば受けとうなか」が直接話法における挿入節として働き、そこに直接、疑問の終助詞である「こ」が続くことができるため、介入

効果が働かないと言えるかもしれない。実際、佐賀方言でも、「こ」の前の節が聞き手の台詞として直接話法的に解釈しにくい場合は東京方言と同様に介入効果が働くようである。

(27) A: あさんな昨日大根こっちゃいニンジンば買わんやったこ?

(お前は昨日大根かニンジンを買わなかったか?)

B: ??うん、大根ば買わんやった。/ うん、大根ば買うた。

(27)のAの発話は、「買わんやった」をことさら強く発音しない限りNN type として解釈するのは難しい。もちろん、名詞化標識の「と」を入れれば、問題なくNN type として解釈される(「#」は返答としては不自然であることを示す)。

(28) A: あさんな昨日大根こっちゃいニンジンば買わんやったとこ?

(お前は昨日大根かニンジンを買わなかったのか?)

B: うん、大根ば買わんやった。/#うん、大根ば買うた。

まとめると、東京方言の場合、名詞化標識の「の」がなければ介入効果のため、NN type で解釈するのは難しいが、佐賀方言では、名詞化標識の「と」がなくても、その前が直接話法的に解釈できる場合は介入効果が弱くなり、NN type として解釈されやすくなる。日高 (2014) では、東京方言の「か(どうか)」に概ね相当する佐賀方言の「こっちゃい」が東京方言に比べて完全な補文構造を作る力が弱いことを論じたが、疑問終助詞の「こ」も、完全な埋め込み構造を作る力が東京方言の「か」ほど備わっていないということが言えそうである。

4 否定極性表現(NPI)の介入効果

介入効果を示す要素の中でも、NPI はもっとも強い介入効果を持つ要素であり(Tomioka, 2007)、実際、東京方言では、強い介入効果を示す。

(29) a.?*誰も何を読まなかったの?

b.?*ジョンしか何を読まなかったの? (Tomioka, 2007)

ところが、佐賀方言は、異なる容認性を示し、(29)に相当する文が容認可能である。

(30) a. だいでんなんば読まんやったと?

b. ジョンしかなんば読まんやったと?

まず、(30a)の「だいでん」であるが、佐賀方言には、東京方言のNPI「誰も」に直接相当する表現はなく、「だいでん」は、形態的には東京方言の「誰でも」に相当する⁸。ただし、「誰でも」が肯定極性表現(PPI)であるのに対して、「だいでん」は否定でも肯定でも用いることができ、どちらか一方の極性を示さない。

(31) a. そいはだいでん知らんやろ。(それは誰も知らないだろう。)

b. そいはだいでん知っといよ。(それは誰でも知ってるよ。)

⁸この「でん」は東京方言の「でも」と同様に「子どもでんでくっ(子どもでもできる)」のように、様々な名詞に付加することができ、生産性が高い。

また、「だいでん」は「みんな」とも異なり、(31a)の文には、否定の方が広いスコープをとるいわゆる部分否定の解釈はなく、常に「だいでん」が否定よりも広いスコープを取る全部否定の解釈しかない⁹。

(30)では、疑問標識として「と」が使われているが、質問の相手が（伝聞等ではなく）直接体験をもとに答を知っていると話し手が想定している場合には「こ」も用いることができる（そのような想定がない場合は「と」を挿入する必要がある）。

(32) だいでんなんば読まんやった(と)こ？

つまり、(30a)が容認されるのは、NPI でなく、常に広いスコープを取るという「だいでん」の語彙的な性質によるということになる。

しかし、同様の説明は(30b)については難しい。「しか」は佐賀方言においてもNPI であるからである。

(33) *ジョンしか来たよ。

したがって、(30b)の文が容認可能な理由を語彙的な性質に還元することはできない。ちなみに、(30b)の文も疑問標識を「(と)こ」にしても容認される。

(34) ジョンしかなんば読まんやった(と)こ？

Tomioka (2007) によれば、介入効果を持つ表現は主題になれないもの(Anti-Topic Items; ATIs) であり、「しか」もATI である。wh-疑問文では、wh-句が焦点となり、それ以外の部分が情報構造上ground に含まれる必要があるが、ATI はground には適しておらず、wh-句の左の位置もまたground には適していないため、情報構造とその文法的実現に齟齬が起き、介入効果が観察されることになる。かきまぜによってwh-句を文頭にもってくると（「何をジョンしか読まなかったの」）、ATI が韻律構造上抑制されて情報構造上ground の要素として解釈可能になるため容認性が向上するとしている。

Smith (2013) は、福岡方言について、wh-疑問文と焦点要素を含む文の韻律が異なることを主張している。wh-疑問文に関して福岡方言と似た韻律的特徴を持つと思われる佐賀方言のwh-句が、統語構造上でもwh-素性は担うが焦点素性は担わない、あるいはwh-句に派生的に与えられる焦点素性(Ishihara 2004)と numerationの時点で語彙項目に予め備えられている焦点素性が実質的に異なり、Tomioka (2007)の説明の枠組みでwh-句が情報構造上ground に存在できるとすれば、(30b) の文が佐賀方言で容認される理由になるように思われるが、詳細な考察は今後の課題である。

5 まとめ

本稿では、佐賀方言の疑問標識の意味機能および否定関連の介入効果を記述し、介入効果について東京方言との容認性の違いを記述してその理由を考察した。本稿で提案した容

⁹部分否定にするには「だいでんは知らん」のようにする必要がある。

認性の違いを生み出す理由については、さらなる議論と証拠づけが必要である。また、それぞれの疑問標識が東京方言とどう異なるかを今後詳細に考察し、「と」「こ」以外の疑問標識、あるいは否定関連以外の介入効果を記述、分析することにより、佐賀方言の介入効果と統語構造、韻律構造および情報構造の関連性が明らかになるものと期待される。

参考文献

- Beck, S. (2006) Intervention effects follow from focus interpretation. *Natural Language Semantics*, 14 (1), 1–56.
- Ishihara, S. (2004) Prosody by Phase: Evidence from Focus Intonation Wh-scope Correspondence in Japanese. In S. Ishihara, M. S. & Schwarz, A. (Eds.) *Interdisciplinary Studies on Intonation Structure 1*, 77–119. University of Potsdam.
- Ito, S. & Oshima, D. Y. (To appear) On two varieties of negative polar interrogatives in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics*, 23.
- Smith, J. (2013) Wh prosody is not focus prosody in Fukuoka Japanese. ハンドアウト, *Japanese / Korean Linguistics* 23.
- Tomioka, S. (2007) Pragmatics of LF intervention effects: Japanese and Korean Wh-interrogatives. *Journal of Pragmatics*, 39-9, 1570–1590.
- 伊藤さとみ (2014) 「選択疑問文の分析–英語、中国語、日本語の比較から」『日本言語学会第148 回大会予稿集』 432–437. 日本言語学会.
- 日高俊夫(2014). 「間接疑問文と「補文性」–佐賀方言の疑問標識を例に」『日本言語学会第148 回大会予稿集』 356–361. 日本言語学会.